

○ゴウザンヨウラクの花 (大橋広好) Hiroyoshi OHASHI: Flowers of *Menziesia goyozanensis* M. Kikuchi (Ericaceae)

ゴウザンヨウラクは岩手県五葉山の特産種で、1962年菊地政雄氏によって本誌37巻12号に発表された。その特徴は原発表に詳しく記載されているが、花の特徴を多少補足しておきたい。東北大学生物学科学生三重野宗利君の協力に感謝する。

花序は3-5個が束状に頂生し、花柄は長さ約10 mmでややまばらに腺毛がある。花は6月下旬から7月上旬にかけて、點頭して開花し、開花時に生品で長さ12-15 mm(押葉標本では9-11 mm)である。萼は4中裂し、外面に腺毛が散生し、特に裂片のへりには長い腺毛が一樣に生じている。花冠は2色性で若時ほとんど淡紅色、後に腹面から淡黄色となる。花冠の先は4裂し、裂片はわずかに不同で、盛期にはやや開出する。花冠は有毛で、綿毛と腺毛とがある。綿毛は短く、花冠の内外面にあり、特に花筒上部から裂片の部分で密生するが、腺毛は外面全体にややまばらに生じている。雄蕊は8本、長さ9-10 mm、花糸の中部以下に微毛がある。雌蕊は長さ10-11 mm、全体無毛、子房は上位で4室である。

日本のヨウラクツツジ属の中では本種の他にヨウラクツツジと最近発表されたヤクシマヨウラクツツジが4数性の花をもつ。ゴウザンヨウラクの分類学上の位置について

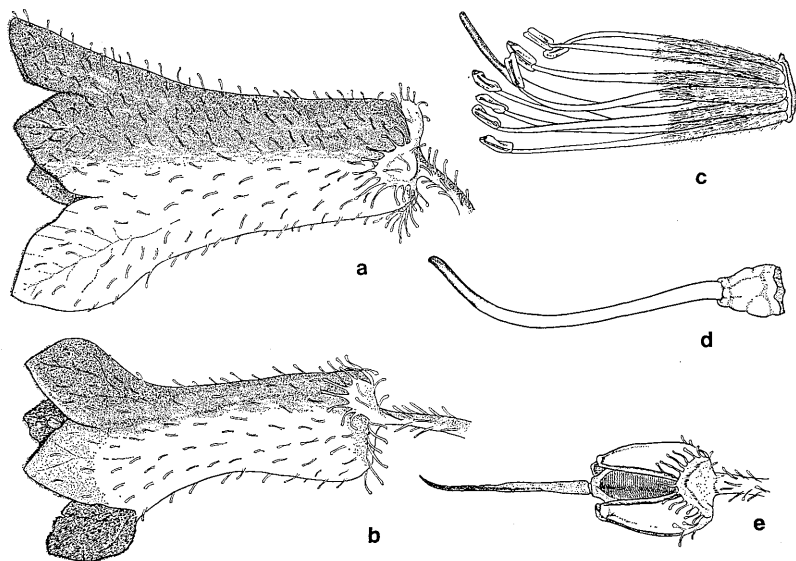


図1. ゴウザンヨウラクの花(×4). a-b: 開花時の花、大きさの変異を示す. c: 萼と花弁とを取り除いて雄蕊と花柱上部を示す. d: 雌蕊. e: 蒴果. a, c-e Mieno 442, b Mieno 445.

は北アメリカに分布する関連種との関係を調べる必要があるであろう。

Menziesia goyozanensis M. Kikuchi in Journ. Jap. Bot. 37: 355(1962). Ohwi, Fl. Jap. ed. Engl. 695 (1965): Fl. Jap. ed. rev. 1019(1965). Fl. Iwate Pref. 90 (1970). Voucher specimens: Iwate Pref., Oofunato-shi, Mt. Goyozan, alt. 950-1023 m. M. Mieno 442 & 445 (TUS). (東北大学 理学部生物学教室)

□浜 栄助(編著): 写真集 日本のすみれ 188 pp. 1987. 誠文堂新光社, 東京. ¥9,800. これはかなり凝った内容の本である。日本という一地域を対象とし、ほとんどが開花期の姿に限られているとはいえ、一つの植物分類群についてこれだけ網羅的に野生の(ばかりではないが)姿を記録した市販書は、世界にも例がなかったのではなかろうか。内容は日本産スミレ属の既知の種と亜種のすべて、変種のほぼすべて、多数の品種と雑種(110もの組み合わせが記録されている)、および野生化しがちな外国産数種のカラー写真 655 枚を中心に簡潔な説明, 栽培, 写真撮影の要点などを記したものである。自生の種類は雑種を除き 7 つの分布域別に掲載されている。キバナノコマノツメ (18 枚), スミレ (22 枚, 品種等も含む) などをはじめ, 同種でも多数の写真が示されていることが多いので, 図鑑とは異なって形態の変異や生育環境の違いを察することができる。巻末あたりに 9 つの新品種名が記載されているが, 新小名の中には異和感を覚える造語がある。雑種は小名がアルファベット順に記していないものが多いが, その場合, 初めの方が必ずしも♀というわけではなさそうである。(橋本 保)

□Kristiansen, J. & R. A. Anderson: **Chrysophyta: aspects and problems** i-xiv +337 pp. 1986. Cambridge Univ. Press, London. ¥13,500. 1914年に A. Pascher が設立した黄金色植物門 (Chrysophyta) は 1) 黄金色藻綱 (Chrysophyceae), 2) 珪藻綱 (Bacillariophyceae) および 3) 黄緑藻綱 (Xanthophyceae) を含むが, この本で扱われる分類群は 1) である。最近電子顕微鏡や培養技術等の発達によりこの藻群の知見は増大した。このことから, アメリカ藻類学会は 1983 年夏に 6 日間に亘って第 1 回国際黄金色藻類シンポジウムを開催した。本書はその講演集で, 計 41 の講演の中から 21 を採録している。6 部から構成され, 各部に 3~4 編が扱われる。各部の主な内容は次のようである。1 部 最近の分類大系, 系統類縁についての考察; 2 部 最近問題となった属・種の電顕を用いた分類; 3 部 鱗片の形成, 葉緑体 DNA の細胞学; 4 部 湖沼の群集動態, ビタミン, 光, 温度, 栄養塩等との関係; 5 部 分布, 生態, 発生, 遷移; 6 部 鱗片の化石, 堆積中のシストと鱗片, 胞子についての命名と用語など。なお採録されなかった 20 編については演者と題名が巻頭に掲載されている。この藻群についてはまとまった書物がなかっただけに本書の出現は有難い。(千原光雄)